

2022. 12. 11. 主日礼拝説教

聖書：ルカによる福音書13章1～5節

『悔い改めるという行為』

東日本大震災並びに大津波、さらに追い打ちをかけるかのような原発事故に対して、ある牧師が次の様に言いました。「これは人々が罪を犯した結果である」と……。よくもそんな言葉がしゃあしゃあと口から出てくるものだと思います。

犠牲になられた2万人におよぶ方々、その数十倍にもものぼる被災された方々がはたして死に値する罪を犯したとでもいうのでしょうか。幼い子どもたちが一体どんな悪いことをしたのでしょうか。

本日の箇所は「悔い改めなければ滅びる」という小標題が掲げられています。これはルカのオリジナル記事ですが、ここには70年に起こったユダヤ戦争後の荒廃した世相が背景に流れているように思われます。それは未来への希望の喪失感とそれに伴う閉塞感が満ちていたことかと考えられます。喪失や閉塞とは自分の人生が見通せないということでしょう。

わたしたちは、遙か先までは無理だとしても、たしかにある程度の人生は見通すことが出来ます。自分で何かを計画し実行に移すことは決して無謀なことでもなんでもなく、むしろ当然のことかと思えます。

しかし、ここでルカが描き出す記事に登場する人々には未来への垣間見ではなく、現状の肯定しか関心を見出せないのです。

彼らは「ピラトがガリラヤ人の血をいけにえに混ぜた」という話を持ってイエスの前に現れます。未来への復興を放棄した者はスキャンダラスな目前のことにしか興味を示せないということなのでしょう。パレスチナから遠く離れた地中海世界で活動するルカにもこういった流言飛語は届いていたということです。この1節の比喩的用語は「ガリラヤ人を血祭りにあげた」という意味です。この話を携えてきた人たちにとっては自己肯定のためだけに、殺されたガリラヤ人が罪深かったからだといえ、つまり初代教会の保障と後押しが欲しかっただけなのでしょう。

そんな彼らに対し、イエスはシロアムの塔の事故で犠牲になった人々の例も取り上げて3節と5節で「決してそうではない」と最大級の否定を繰り返してここに宣言します。

神の裁きへの警告と改心の勧めは諸刃の剣として当時のファリサイ派や律法学者が常用していた慣用句です。脅しの類として使用されていたということです。

イエスはこの世の不幸や災難の大きさと神に対する罪の大きさととの機械的比例因果関係を認めません。ただそのような因果関係というループ構造に陥ってしまう人生を選択してしまうならばわが身を滅ぼしてしまうと警告されるのです。不幸や災難に苛まれる人々を「自己肯定のための道具」としてしか見れないような人生の見通しを「悔い改めよ」と言われるのです。

人生の見通しとは、わたしたちが目論んだ目的や解答が必ずしも見出し得るものではありません。しかし、それでもとにかく進んで行かなければならない問題もあるわけで、そういう意味では人生が見通しの良いものでないことも承知しておかねばならないでしょう。そのように置き去りにした問題の累々たる様子を省みる作業が必要なのです。これがイエスの問う宣言であり、悔い改めるといふ作業なのでしょう。